

タイトル

「救われた心臓」

川嶋かつみ

ログライン

心臓移植で生かされているというプレッシャーに、身動き取れない健二（28）が、一度は人の役に立ちたいと言うケンカファイターと、自分を慕ってくれる甥っ子の光（小学3）が自分と同様、心臓移植手術をしなければならなかったことを知る。

登場人物

速水健二 (28・25・12) . . . フリーター

武 (35・32) . . . 健二の兄 (生命保険会、課長)

夏実 (30) . . . 健二の姉 (アパレル・バイヤー)

芳朗 (60・44) . . . 健二の父 (信用金庫、常務理事)

待子 (58) . . . 健二の姉 (主婦)

光 (小学3年) . . . 武の長男

武の妻

モヒカン頭の巨漢 (30)

場末の年増のママ

子供A . . . 小学6年 (いじめられてる子)

子供B . . . 小学6年

子供C . . . 小学6年

子供D . . . 小学6年

中学生A

中学生B

中学生他

担当医

看護師



○元の健二

ピクリとも動かない。

が、急に両手で紐を掴み解く。

健二 「ウグツ……ハァーハァー、オエー」

瞳孔が見開いている。

足元の洗濯カゴを蹴飛ばす。

○駅前繁華街（例、吉祥寺等）裏路地・夜

行く健二。

○場末のバー

カウンターと3つのテーブル席は、煙と酒に包まれ、男と女が絡み合っている。

年増のママが囁く。

ママ 「ねえ、一度、抱かして」

健二 「やめといたほうがいい」

と、奥のドアに向かう。

携帯が鳴る。見る、父からだ。

切って、入って行く。

○博奕部屋

ポーカーを楽しんでいる輩。

健二、見廻す。

叫び声が突き刺す。

「逃げ出したと思ったじゃねえか」

振り返る健二。

客がスーッと壁に吸い寄せられていく。

モヒカン頭の巨漢（30）が立っている。

健二 「びっくりさせないでくれ。心臓に悪  
いんだ」

巨漢 「オメエが、そんなこと言うかわねえ」

健二 「じゃ、始めようか」

巨漢 「ちよつと、待ってくれ。万が一の為にさ。聞いてくれ」

健二 「なんだよ」

巨漢 「実はな、俺の体はさ、とつても貴重なんだよね」

健二 「だから」

巨漢 「丁寧に扱って欲しいんだ」

健二 「……何、たわけたこと言ってるんだよ」  
健二、先制攻撃。巨漢を難なく倒し、殴る、蹴るのやりたい放題。

しかし、巨漢、ムックと立ち上がり、反撃。

健二、胸に膝蹴りが食い込み、屈伏し、目が彷徨う。

回想 × × ×  
ベッドの健二（小6年）が、

「いいの、もう、ぼく助けしないで。イジメられるの、イヤなんだ……このままでいいの、助けないで」

芳朗（44） 「何、言ってるんだ、健二」

平坦だった心電図が波打つ、ピッピッピッピッ……。

健二 「（目が覚め）ここはどこ？」

芳朗 「助かったんだよ」

健二 「（虚ろな目）」

× × ×  
巨漢、足で健二の胸を踏みつけている。  
健二 「アウツ（泡を吹く）」

トドメを刺そうと巨体を宙に浮かせ、プレスしようとした瞬間、体制を交わされ、地面に叩きつけられる。

健二、反撃し巨漢を追い詰め、一撃を食らわす。

仰向けに倒れる巨漢。

巨漢 「……健二よ、言ったよな、丁寧に扱ってくれよ……」

健二 「話になんねえよ」

巨漢 「だから、借りを返す。また勝負だ」

健二 「……」

巨漢 「俺さ、今のままじゃいけねえって、考え中なんだよな、健二。分かるか……」

健二 「……」

○ある一室

女、健二に股がり腰を振る。  
携帯鳴る。

健二、渋々出る。

芳朗 「身体、大丈夫か……」

健二 「……（切りかける）」

芳朗 「切らないでくれ。明日、光くんの世話頼む」

健二 「何で、兄貴が頼まないんだ」

芳朗 「俺が頼んでる。行ってくれ。光も

待ってる」

健二 「……」

○武の一戸建て。（翌日・朝）

○同・中

食器洗いを手伝う光（小3）。

夏実 「そう、次、これ」

光、そのスプーンでシンクを叩く。

夏実 「コラー、ダメよ、やめなさい」

止める。

夏実 「さつき、上手に拭いてたでしょ」

また、激しく叩き始める。

夏実 「そんなことしない、ダメーッ！」

光、動き、止まる。

武、上着を羽織りながら、光を睨む。

武 「光！夏実、悪いな。せっかくの日曜」

夏実 「仕方ないでしょ」

武 「じゃ、頼むわ」

チャイム、鳴る。

× × ×

開けると、

健二 「……」

武 「何だ」

健二 「……（踵を返す）」

武 「オヤジか」

健二 「……別に」

武 「お前に用は無い」  
光 駆けて来た光、健二に飛びつく。  
光 「ヤッター、今日、何する？」  
健二 「よう！おひさだよな！」  
武、来た夏実と顔を見合わす。  
夏実 「せっかくだからさ、いいんじゃない」  
武 「おい、今後は……」  
健二 「最後にするからさ」  
武 「当たり前だ（出て行く）」  
健二 「……」  
光 「ねえ、ねえ、早く、外、行こうよ」  
健二 「ああ、行こう」  
夏実 「ラッキー、助かったわ」  
健二 「言われてること、やってるだけだよ」  
夏実 「もーウ……お昼、食べるんでしょ」  
健二 「作れるんだ」  
夏実 「見直したでしょ」  
健二 「そう……かな」

○武家近辺の市民公園

ベンチで図鑑を見てる二人。  
「銀河系、木星、星座」に夢中の光。  
健二 「そんなに、面白いか」  
光 「うん。行きたいなあ、宇宙」  
健二 「そうか……（空を見上げる）」  
光 「（光も見上げ乍ら）宇宙飛行士、なれると思う」  
健二 「そうだな……無理だな」  
光 「なんで」  
健二 「いっぱい勉強しなきゃ。死ぬ程さ。できる？」  
光 「うん」  
健二 「（微笑む）」  
サッカーボールが足元に転がってくる。  
中学生、数人の一人がお辞儀し乍ら、  
中学A 「すいませーん」  
健二 「よう、ちよつとやらしてくんねえか」  
中学A 「はー……（仲間の顔を伺い）ちよつと、だけなら」

健二 「すまん。光、サッカーやろう」

光 「やったこと、ないもん」

健二 「じゃ、しよう」

光 「……ぼく、動くの得意じゃない」

健二 「そんなじゃ、宇宙飛行士なれねえぞ」

光 「じゃ、する」

ボールを小突く、健二の後を追う光。

健二、振り返り、光にパス。

受け止めるがバランス崩し、倒れる光。

健二 「なんだ。その、屁っ放り腰は」

と、転がっていったボールを捉え、

健二 「こう、するんだ！」

と、高々と蹴り上げる。

健二 「おい、いったぞ！」

中学B 「ったく。なんだよ」

健二 「そう、言うなって。やるぞ」

楽しむ、健二、中学生、そして、光。

懸命に走る光、

その時、バツタリ、倒れる。

健二 「救急車、早く！救急車、呼べ！」

### ○病院・緊急救命室

チューブに繋がれた光を見つめる武。

担当医 「今日1日は様子を見ましょう」

武 「……」

### ○同・待合ロビー

待っている、芳朗、待子、夏実と健二。  
やって来る武、健二に、

武 「光まで、殺さないでくれ」

健二 「……そんなに、酷いなんて」

武 「お前なら、判ってたはずだ」

健二 「そんなことない」

武 「（呟く）ワザとじゃないのか」

健二 「えー！」

夏実 「兄さん！」

芳朗 「おい、武！」

待子 「そんなこと言っちゃ……」

健二 「……………（武を睨んでいる）」

× × ×

回想 （3年前）

庭、裏手の物置で、

健二の上で武の妻が喘いでる。

妻 「ちゃんと、生きていけるわよ……」

胸の傷を撫で、抱きしめる。

突っ立てていた武。

慄く二人。

× × ×

睡眠薬で自死した妻。

× × ×

武 「おい、健二、聞いているのか。お前と

一緒なんだ。心臓なんだよ、心臓。移植な

んだよ。まったく！お前を見てたらさ」

健二 「サッカーしたかったんだよ。ホント

はさ。光、したいんだよ。走り回りたいん

だよ。何も、判ってねえのは、そっちだろ。

放つといてくれよ、俺のことだってさ……」

武 「……」

健二 「俺はさ、死にたいと思ってても死ねな

いんだ……これはさ、俺の命じゃねえからよ」

健二、シャツ上げ、胸の傷を曝け出す。

健二 「欲しけりゃ、あげるよ。心臓。使っ

てくれよ。頼むよ……」

武 「……」

夏実 「……」

待子 「……」

芳朗 「健二……」

そこへ、看護師来て、

看護師 「すみません、健二さんて方、いらっ

しゃいますか。坊ちゃんが呼んでるんです」

健二 「僕ですが……」

看護師に続く健二。

○ 同・病室

顔を覗かす健二。

光 「（ニツコリ）健二兄ちゃん、また、

遊んでね。僕、もっと、うまくなるからさ」

健二 「宇宙飛行士になるんだもんな」

○博奕部屋（夜）

傷跡を晒し構えてる健二。

態勢を整える巨漢。

健二、挑みかかる。

が、空を切るばかりで相手にならない。

巨漢、健二を投げ倒し、立ちはだかる。

巨漢 「俺の勝ちだな」

健二 「すっきりした顔してんじゃねえか？」

巨漢 「俺は思ったんだ。悪いことしてもよ。

最後はいいことしようと思っただけ。オメエの

体見て思ったんだ……ドナーになったんだよ。

いいだろ。ワハハハハ……」

○建築現場

汗だくで鉄骨を運ぶ健二。

（終）